

「最後だとわかっていたらなら」

鈴木睦 むつみ

私たちは、平穏な日々が明日もその後も続くと思っただけで生活しています。しかし、思いがけないことが起こるのが現実の世界です。

鈴木睦さんは、二〇〇七年七月に『最後だとわかっていたらなら』（ノーマ・コーネット・マレック著、サンクチュアリ出版）という英和対訳詩集を翻訳出版しました。「もし、明日が来ないとしたら、わたしは今日、どんなにあなたを愛しているか伝えたい」という詩です。本書は、二〇〇一年の9・11同時多発テロの後に世界中で話題となり、感動の渦を巻き起こしました。

睦さんは、この詩を初めて読んだとき、まさに自分に語りかけられたことばのように受け取り、翻訳に取りかかったといいます。それには理由があります。

○お姉さんが大事故に

睦さんの家は、お姉さんのかおりさん、そしてお父さん（政夫さん）お母さん（アサ子さん）の仲の良い4人家族だった。睦さんと

2歳上のかおりさんは、双子のように育った。お姉さんのかおりさんが高2の春のことだった。恋心を抱いていた高校の同窓の先輩から、「バイクの後ろに乗ってみない？」と声をかけられ、楽しいドライブをしていた時のことだった。

その先輩の不注意により、大事故に遭ってしまう。かおりさんは、内臓破裂と肋骨や足を骨折する重傷を負った。不幸中の幸いで、命は助かったものの、C型肝炎を発症した。恐らく大量の輸血または血液製剤のせいと思えるが、確かなことは分からなかった。

大けがを負ったにもかかわらず、無事に高校を終えたかおりさんは、大学と大学院へと進学した。国文学の専攻だった。

ところが、大学院1年生のとき、脳細胞が少しずつ冒され機能しなくなるという、病名不明の難病にかかっていることが判明する。事故の後遺症の一つらしい。一九九二年12月から大学院を休学し、東京の大病院に入院して闘病生活に入った。

担当医師は、厳しい見通しをお父さんにだけは伝えていた。しかし、お父さんは本人にも家族にも医師の言葉をそのまま伝えることはなかった。

お父さんの勧めでかおりさんがバイクを運転していた先輩と婚約したのは、その頃で

ある。肝炎のせいで、妊娠や出産も望めないことを理解した上での決断だった。病いが完全に癒えることは無理だとしても、せめて人並みの幸せを味わわせてあげたい、という親心だろう。

○かおりさんの召天

一方、病いの進行は早く、婚約から1年もしないうちに、まずしゃべることができなくなった。初めは手が動いたので、筆談でコミュニケーションがとれた。つらい中でも冗談を言っただけで睦さんを笑わせたりもした。

しかし、しだいに体も動かなくなり、食べられなくなる。そして入院後わずか8ヶ月の闘病の後、一九九三年8月に、24歳の若さで帰らぬ人となった。

睦さん「姉は、大学院で国文学を専攻し、クリスチャン作家の島尾敏雄を研究していました。『死の刺』^{とげ}が代表作品で、映画化もされた作品です。ただ、姉は1年生の時に病気が出てきて休学し、そのまま召されました。

事故を起こした先輩に対して、私たちは民事告訴をすることはできず、私たちが民は、明らかに運転者のミスでしたから。でも姉は、高校時代から彼に恋心を抱いており、親同士も知り合いました。（以下略）